

一茶の方言連句について

川 島 つ ゆ

信濃方言 独吟

こりよそけへいつけて置けよお年玉

何この国でか春風のふく

引かけてひつさばいては風張て

ずんべらぼうにばか長い町

ごうせいな嘶に更る月の秋

そねいに啼くなくつわ陣ウ

見せいかず花火の揚るそれ揚る

このけんまくにつけられし文

めつぼうに妹のかたは器量がよい

うらのたんばで何かささやく

おやげねへ芝居のあるに雨がふる

へいもの葉から露のころげる

後の月見つめておなべはじめつつ

新酒の出来にたまげ申た

こげたまに船に積こむ今年米

それそのぼこにきもやかせるな

わんだれもさうじやぞ花の真盛

げいろも啼けばがにも這出す

御笑止なこねへにたんと草の餅ニオ

ちとばた待てぢぢまつて行く

せつなしないでない子をつつばらみ

ごんぜやくほどなほつの恋

うんせいに夕立雨がふり出した

まっぱだかにてすすむ縁先

おっかなや犬が啼つく夜の道

へい売切った市のくだもの

とつときの日傘をさして善光寺

ろくに居ながら茶を飲で出る

煤じみたはぐろの水に月うつる

での炬燵へいんで寝そべれ

米の値をのほうづもなく引上てニウ

かまけながらも 法事つとむる

がんぢょうな柱の見ゆる台どころ

あちや一杯とうけるさかづき

餓鬼どもがへし折て来る花の枝

やみくもに啼く藪のうぐひす

一茶の方言連句について

六月十八日

この独吟歌仙(三十六句形式の連句)は、一茶の郷里信州柏原の近村新郷村の人で、後に俳諧寺号を継いだ丸山可秋氏の編した『一茶一代全集』(明治四十一年)に収められてある。しかし、編者没後の出版であるために、この歌仙の出所・年代等を究めるよしなく、勝峰晋風氏の『一茶一代集』(日本俳書大系第十二巻、昭和二年)にも、制作年代未詳のまま採録されてある。なお小著『一茶の種々相』(昭和三年)には、この歌仙に短評をこころみてある。

しかるに近年、大阪の某実業家がこの方言独吟歌仙の真蹟なるものを蔵されていて、昭和二十八年、芭蕉二百六十年祭記念展覧会が大坂三越に開かれたのを契機として、同年、阪大教授故山崎喜好氏が解説されて『福寿草』と題する筆跡写真の小冊子として広く頒布されたのであった。

内容は歌仙二巻で、第一は「文化十二弥生両吟、野がけ」と端書して、

世に住ば人の為にも霞けり

桜ぞだたぬ敷とてはなし

文虎
一茶

この発句・脇にはじまる文虎・一茶両吟で、終りに「筆者、俳諧寺一茶」とある。第二がこの方言連句で、はじめに福寿草の絵があった「福寿草も一茶」と書いてある(山も一茶、人も一茶などと書くのは一茶の慣習である)。次に「俳諧寺独吟、信濃方言」と端書して、前記と同じ内容の歌仙で、終りに「鯉業者一茶」と署名してある。なお、何の理由ともなく、何かの文書の奥書とも見られる次の如き別紙がつけ足してある。

以上のごとくであるが、前者は信濃教育会編一茶叢書第九編『小品三十種、下』に「ほまち畑」と仮題して採録されてあるもの一つで、これは上水内郡浅野の門人西原文虎が、文化十一年から文政九年まで、すなわち一茶五十二歳から六十五歳命終の前年まで、十三年間にわたる一茶との両吟歌仙を主として清記しておいたものである。各巻末に制作年月を記し、各巻の附句中の文句をとって、それぞれ小見出しがつけられている。この歌仙の小見出しは仮題とされた「ほまち畑」である。巻末に文化十二年二月吉日とある。端書は「心ならず野がけして」となっているが、本文は写真のものとし、二字の異同が見出されるばかりである。しかし、写真に「筆者、俳諧寺一茶」とある現代風な署名は異例であり、特に方言連句における「鯉業者一茶」は他に所見なく、彼の履歴に照らしても合点ゆかぬものである。写真だけで断ずることは憚られるが、両巻とも一茶晩年の筆蹟を彷彿させるものであるとは言え、「鯉業者」とある一点だけでも容易に信じ難いのである。

遠慮なく言わせてもらえば、年代のはっきりしている文虎との両吟を先立て、末尾に理由不明の別紙をつけ足してあることは、この方言連句の制作年代を文化十二・三年ころと推定させるための作為ではなかったかと考えられ、なお、あるいは落合家の家蔵であったらしく匂わせたのではあるまいか。落合家は現今の北長野駅、元の吉田駅の旧家として知られた家で、一門には今も名画を所蔵してい

る家もあって、過去においても書画等に興味ある家筋であつたらしい。ついでながら一茶の書体は非常に癖があつて、それだけに真似易くもあるので、大正期以来もてはやされるようになった一茶の遺墨、特に郷里から出たものに偽筆が多いと言われている。

しかし、私は方言連句そのものまで偽作であるとは思っていない。一茶には未定稿ながら信濃言葉を中心に、諸国方言をいろは順に分類集録した手記があつて、これを「方言雑集」と命名して、一茶叢書第二編に収めてある。馬琴の俳諧の師越谷吾山の「物類称呼」の大きかりなものには及ばないが、共に近世俳人で方言研究に着手した先駆者である。大体一茶の句で、いわゆる一茶調と呼ばれるようなものの大部分は、方言俗言で仕立てられていると言つてよい。その中にも、

春霞いっちちさいぞおれが家

一夜さに桜もささらほさらかな

竹の子のうんぶてんぶに出たりな

門番にかつげなされて啼く水鶏

下駄からりからり夜永のやつら哉

かさい言葉

せな見さい赤いはどこの梅たんべえ

信濃言葉

赤いぞよあのものおれが梅の花

信越国境

此処あちやとそんまの国さかひ

など、方言卑語に特別の興味を示しているのは、少年時代から江戸に放浪して、江戸者から軽蔑されるままに、みずから信濃の椋鳥をもつて任じ、あるいは、

雪の日やこきつかはるるおしなどの

(おしは冬季出稼ぎの信州人に対する蔑称)

などと世間を白眼視し、なお、醜に美をもとめ、尊貴なものを地下に引下してよろこんでいるような反骨精神を感している作風から見ても当然である。その彼が故郷に帰住して、一応生活の安定を得た晩年に独吟の方言連句を試みようとしたことは、極めて自然であらう。

この独吟連句が帰郷後のものであることは内容によつて明らかであり、これが郷里で発見されたものであることも、断定してまちがいないであらう。これを最初に採録した「一茶一代全集」の編者が郷土人であり、この全集出版以前に故人となつていたのであるから、この遺稿の採録されたのは、おそらく明治中期であつたらう。江戸俳壇で一応存在価値を認められ、郷里に帰つて宗匠生活を送つていた一茶は、在世当時から異色ある俳風を一部の人から愛好されてはいたが、要するに一地方俳人であつたに過ぎなかつたのに、自然主義文学思潮に乗つて、特殊な価値が発見され、その作品・伝記の研究が盛んになつたのは明治後期からである。しかし芭蕉・蕪村と並称されるまでになつた一茶ブームは大正期に入つてからであつた。従つて、この遺稿の採録されるころには、ためにするところあつて偽作する人などあつたらうとは思われず、また、郷党のあいだにこれだけの技倆ある俳人があつたとも考えられない。そして、何

よりもこの独吟歌仙には一茶の特色がよく出ている。

とは言え、この独吟歌仙が、すばらしい出来ばえであるとは考えられない。本来総合芸術としての連句制作の場では、一座の気分の融合と、相互のアイデアの受渡しによって新境地が開かれてゆくのであって、独吟ではとかく変化が乏しくなる。「発句は門人の中、予に劣らぬ句する人多し、俳諧(連句の意)に於ては老翁が骨髄」(宇陀法師)と自負しているような芭蕉にも、独吟と伝えられているものがあるが一向に生彩なく、これには疑義もあるもので、むしろ芭蕉は独吟をこころみなかったと考える方がよいであろう。一茶の独吟歌仙にも想の行きつまったところがあるので、一茶自身、も少し推敲したいと考えていたかも知れず、あるいは、一茶の急逝した時、机上にあった草稿が何者かに盗み去られた(文政版一茶発句集跋による)ということであるから、その中に清記したものがあつたかも知れない。昔の人は紙を大切にしたが、特に一茶は、俳人の配り物である歳旦帳や過去帳、こよみの裏までも利用している。点火用のつけ木に書いた句稿ものこっている。一茶百回忌(大正十五年)のころ、彼の生母の実家宮沢家から発見された一枚の遺稿を、郷里の人々と共に判読したことがあるが、それは麦粉をもちった紙袋(周囲に糊を用いず、細かく縫い合わせてあつた針目がはつきり残っている)を解いて、横二つ折にして、紙の表裏にかけて細字で無秩序に書込んであつた。晩年の筆で、メモであるためにわかりにくかつたが、内容に照らすと、文政七年(死の三年前)九月、湯田中温泉の門人希杖宅で、病後の療養中の日記断片であつた。彼の『七番日記』の例を見ても、後世の我々がおどろくばかり、五号もしくは

六号活字大の細字でびっしりとかきこんであるが、このようにメモしておいたものを、まとめて句帳に書込む習慣であつたらしい。この独吟歌仙にしても、有合わせの紙にかいた未定稿であつたかも知れないのである。

それでは「方言雑集」も参考しながら、一通り解説してみよう。はじめに「信濃方言 独吟」とあるのは、編者の附したものとされる。一卷を通じて必ずしも信濃特有の方言ばかりではなく、中には、柏原辺では使われていないらしい言葉も交っているのである。こりよそけへいつけて置けよお年玉

春季。「いつけて」は、乗せての意である。このお年玉をそこへ乗せておきな、と、気軽く言放つた言葉を発句としたのである。このお年玉もたいしたものではなく、手拭い一本くらいと思われる。方言雑集に「いつける 乗セル事 エド」とある。江戸でも使われていたものか。私は北武蔵の農家の人々からこの言葉をしばしば聞かされた。

何この国でか春風のふく

春季。「どこの国でか」である。脇句は発句の余情を補うのが本意であるが、この脇句によって、発句は、着ぶくれてきたつにもぐりこんで首ばかり出しているような人物が、たれかに指図している言葉となる。

もちろん旧暦ではあるが、まだ、いつ春が来るとも知れないような雪国の正月気分が、二句の間にただようている。

引かけてひつきばいはは風張て

春季。前句における暖国への連想から、当然春の情景が登場して

来た。昔は皆、風を手製したものである。骨をけするやら、紙をはるやら、糸目をつけるやら、なかなかの労力である。その丹精のことを、屋根や木の枝にひっかけて破ってしまったては、またあきずに労力を繰返している。ひたむきな少年の世界である。

柏原辺でも、雪のとけるのを待ちかねて、龍という字をかけた手製のたこをあげたそうである。「雪とけて村一ぱいの子供かな」という彼の句も思い合わされる。

ずんべらぼうにばか長い町

雑。前句の風上げしている場所を示したものであるが、この四句目は、まさしく彼の郷里柏原を念頭においている。柏原は北国街道の主要駅で、地勢は南北にだらと伸びている。「我里はどう霞んでもいびつなり」とも詠んでいる。以前（大正末年ころまで）は街道の中央にさわやかな流れが通っていて、その両側が松並木になっていた。並木の松に風のひっかかっている風景も見られたことであらう。

ごうせいな嘶に更る月の秋
秋季。秋季に転じている。こは歌仙の表五句目で、月の定座でもある。「ごうせい」は豪勢で、すばらしい話、あるいは多少法螺の意も含んでいるようである。

月明の夜、ずんべらぼうにばか長い町の一軒の家に、多勢の人が寄り集って、うそまこととりませた話に興じて夜を更かしているさまである。

そねいに啼くなくつわ蟬

秋季。「そねえ」は、そのようにである。ほら話に興じた連衆が

一茶の方言連句について

解散して、にわかに虫の音が大地に満ちて来たような、露深い月夜の情趣である。この虫の音を聞いている人が、ほら話をした人であっても、それを聞いていた人であつてもかまわない。ただ、無意識に農民の胸を襲ってくる秋のあわれが感ぜられる。

古今集の「きりぎりすいたくな鳴きそ秋の夜の長きおもひは我ぞまさされる」と類想であるが、もしこれが「いたくな鳴きそくつわころぎ」であつたら、どうであらうか。まるで気の抜けた句になつてしまふではないか。そねいに啼くなくつわ蟬——せつせつたる情感が胸を打つ。方言の持つ強味である。同時に、この感傷の人が田園人であることも直接に説明し得ている。ここまでが表六句である。表・裏は懐紙（奉書、鳥の子紙等、横半折りにしたものを用いられる）の書き方による命名である。

見せいかず花火の揚るそれ揚る

秋季。ソレソレ花火があがるよ、見に行こうの意である。花火は秋季にあつかわれてある。此処から初夏に移るので、前句の感傷を転ずることを意識しての作意であらう。

「いかず」は、行かんずの転化で、見にいかなずが更に訛つて「見せいかず」となつたのであらう。その他、やらす・食わず等、肯定を意味する方言は可なり広範囲にわたっているようである。特に静岡県中部で多く使われていたらしい。「東海道中膝栗毛」三編の上に、藤枝あたりで、茶屋女や土地のおやじを点出して、おもしろい会話のやりとりがある。

このけんまくにつけられし文

恋。「けんまくは、一般に使われる「物凄顔」というような意と

「はちがうが、そこから転化した方言で、「おそろしいほど沢山」とか「おどろくほど沢山」とかいう意である。花火見物の混雑の中
で、沢山のつけ文をされたのである。

めつぼうに妹のかたは器量が良い

恋。「めつぼう」は滅法で、非常ということ。前句の恋文をつ
けられた女性のことを附けたのであるが、一句としては働きがな
い。前句との関連において恋句となる。

うらのたんぼで何かささやく

恋。「ささやく」に恋の意を含んでいる。つけ文から三句恋くさ
い句が続いている。但し、この句を直ちに男女の密会と見るより
も、何か、器量よしの娘の身辺に企てられている隠謀でもあるか
に解する方が、活かした見方であるかも知れない。

おやげねへ芝居のあるに雨がふる

雑。方言雑集に「おやげない 気ノ毒」とあるが、必ずしも信濃
方言とは限っていない。語源は親氣なしで、なまけないとか、困
たものとかいう意である。かわいそうという意に用いられること
もある。

ここでは、せっかく芝居がかかっているのに、何とあやにくな雨
がふることでよと、女どもが怒じているのである。この句に転ずる
と、前句の「ささやく」も密会や陰謀ではなしに、女同士が芝居へ
行く相談でもしていたのであろう、というように軽い意味に見直さ
れてくる。

へいもの葉から露のころげる

秋季。「へいも」は葉いも、すなわち里いものことである。信越

方面の老人連は、「もはや」のことを、もうへえなどという。

雨が降り出したので、いもの葉から露のころげ落ちてくるさまで
ある。それだけのことであるが、このところ数句、人情の句が続
いたので、このように淡々たる叙景によって、一卷の気分を変えたの
である。こういう句を「やり句」とか「にげ句」とか名づけてい
る。殊に、此処は月の定座（初裏七句目）の前であるから手心を要
する。

後の月見つめておなべはじめつ

秋季。「おなべ」は夜なべ、夜仕事のことである。北武蔵辺の農
家で使われている。

おなべという方言から受ける感じは、やはり農家の夜仕事であ
る。月のさし込む土間に座って、縄ないでもしているのであろう。

「見つめて」に、十三夜ごろの、やや寒むのしんみりとした気分が
ある。ここは初裏七句目で、大体月の出る場所であるから、前句を
雨のけしきでなく、いもの葉にころがっている夜露と見立てたので
ある。二句の間には、冴え渡った月光がみなぎっている。

新酒の出来にたまげ申た

秋季。「たまげる」は、方言というよりも広く東国言葉というべ
きであらう。昔風の醸造法によると、新酒の出来るのは秋である。

ここでは農家の手造りと見たい。新酒の上出来に喜悅しているの
は、必ずしも前句の人物ではなく、家人であつてもよく、あるいは
前句のわびしげな人物とは対照的な隣人であると考えてもよい。

こげたまに船に積こむ今年米

秋季。「こげたま」は沢山ということ。驚嘆の意を含んでいる。

前句の新酒の出来に連れて、これも賑々しい出来秋の情景である。

それそのぼこにきもやかせるな

雑。方言雑集に「赤子（ボコ） ニカツ子」とある。「きもやかせる」は、肝を焼かせる、気をもませること。

今年米を船に積みこんでいる。どきどきの中で、赤子などかまいつけられず、キイキイじれ泣きしているのを、はたから、その母親などに小言を言っているさまである。

わんだれもさうじゃぞ花の真盛

春季。初裏十一句目、花の定座である。方言雑集に「わんだれ善光寺訛 ソチ達 ソナタ衆ナド、下輩ニ対シテ云フ」とある。

お前たちもこれこの花のように、今が人世の真盛りなのだぞ、の意で、前句の幼児に言っているのではなく、子供にもかまいつけず、ひしめきあっているような若者どもに向って言う年長者の言葉である。しかし、前句に意地を焼いている幼児がいて、そのことであれかをたしなめており、ここにも多勢の若者がいて、何となく教訓めいた言葉を附けているのは、何としても働きがな。もつとも、独吟であるばかりでなく、方言連句というワクの中にあつては、無理もないことも知れないが。

げいろも暗げばがにも這出す

春季。方言雑集を参照するまでもなく、「げいろ」は蛙、「がに」は蟹のこと。これも東国言葉というべきであろう。前句の花によそえた人世の春に対して、これは盛んに活動し出した自然の春を対応させてある。二三句たるんできたが、ここで初裏最後（十二句目）の生気をとりに戻している。

一茶の方言連句について

お笑止なこねへにたんと草の餅

春季。笑止は俗にあざけり笑うことに使われているが、古典的には、困ったこと、あやにくなこと。それとも少しちがつて、この「お笑止」は信州方言で恐れ入るとか、お気の毒ナとかを意味する。

げいろが鳴き、がにの這い出す長閑な春の日に、手製の草餅ももらったのであろう。必ずしも雛の節句とばかりは限るまい。これはもらった方のあいさつである。「まあ、こんな沢山頂戴して恐れ入ります」の意で、芳しい香の立つ重箱のふたをあげながら、言葉忙しく世辞を言っている内儀の喜悅した顔が見えるようである。

ちとばた待てちぢまって行く

雑。「ちぢまって」は、小便をして、の意。柏原辺では使われていないようであるが、信州の他の地方では、あっぱまる（大便をすること）ぢぢまる又はぢぢよまるとも言うそうである。現今のことは知らない。「まる」は排泄することの古語である。方言雑集には「ジジマルガシイヨスル 落ル音草ニアタリテジイジイシイト云」と、落語の落ちのようなことが書いてある。

「ちつとばかり待って小便をしてゆく」の意である。一句としては少し無理であるが、草もちを他家へ持って行った人を、戸外で待ち合わせている人物でも連想したものであろう。

せつなしなてのないう子をつつばらみ

恋。「せつなしな」は、辛いなア、である。前句の何となく気重たい動作から想を引いて、隠し子をはらんだ女のやるせない気持と、身の重さとを、「つつばらみ」というような思切つて下卑た言葉で現してある。露骨な恋句である。草の餅から二の表（十二句）に移

ったのであって、二の表は、普通の巻でも自由なあばれどころなどと言われている。

「ござややくほどなほつゝの恋

恋。「ござややく」は、せわをやく意。はたからうるさく言えは言うほど、一層恋ごころのつゝつて来ることである。その結果「ててのない子をつつばらみ」というような事態も生じてくるわけで、こんなのを逆附けともいう。

うんぜいに夕立雨がふり出した

夏季。二句つづいてゐるねとねとした恋から離れるために、さわやかに夕立を降らせた。「うんぜい」は雲勢であろうか、非常に勢いよきの意。また、運よきの意にも使われているという。

まっばだかにてすむ縁先

夏季。いかにも気持のよい、野趣満々たる附け意である。どうどろと降る夕立のしずくをあびながら、素はだかで縁に涼んでいる人の、たくましい胸毛が、ほのかにおののいているように思われる。

おつかかなや犬が啼つく夜の道

雑。「おつかかなや」は、恐ろしいこと。一般化している東国言葉というべきであろう。前句を夜涼みと見て、これは灯影を自あてに夜道をたどつて来る人が、途中で犬にほえつかれて難儀しているさまである。

へい売切つた市のくだもの

夏季。へいもの場合と同じく、はの転化で、はや売切つたの意である。「くだもの」だけでは季語を成さないが、次句が夏季なので、ここは夏季と見立てなければならぬ。夏の果物には桃・すも

も・あんず・はたんきょうなどがあろう。

前句につれて夜の情景で、次第に夜の更けてくるさまである。善光寺に近い権堂という遊び場に通う小路あたりに、灯影を並べている露店の果物売りなどが連想されてくる。

とつときの日傘をさして善光寺

夏季。はたして善光寺が出て来た。「とつとき」は取置きで、大切にしまつてある日傘のこと。めつたに物見遊山することもない家庭婦人が、ようなうの思いで、善光寺の開帳まいにし出かけて来たという趣きである。

前句の果物売りは、ここでは昼間の市びとと見立てられてあるので、「へい売切つた」に市の賑いのさまが見える。

ろくに居ながら茶を飲で出る

雑。「ろくに居る」は、あぐらをかくこと、人が六の字形に座るかっこうだとも解されている。但し、方言集には「ろくに居る」平話、平二居ヨナド二同」とあつて、東京辺でいう「おたいらに」とか「おらくに」とかと同語義らしい。柏原辺では比較的ていねいな言葉として、客に食物をすすめる場合など「ろくにいてあがつて下さい」というように使われているという。

前句の開張まいるの人が、久しぶりで外出したついでに、知人の家にも立寄つたさまと考へたい。「まあおらくにいて、ゆつくりお茶でもあがつて行つて下さい」の意である。

煤じみたはぐろの水に月うつる

冬季。特に雪国での習俗であろうが、昔は炉の端に小がめを置いて、それに鉄くずを入れて、そのさび水で歯をそめるお歯ぐろ水と

した。それゆえに「煤ぐた」の意が明らかである。しかし、この煤は煤掃き（大掃除）の煤である。昔の煤はきは十二月ときまっていたので、すなわち、この月は冬の月である。この句から見ると、前句は、煤はきの手伝い人にも言っている言葉となる。

ここは二の裏十一句目、月の定座である。もつとも、一卷の運び上、月はくり上げることも、くり下げることもできる。

でいの炬燵へいんで寝そべれ

冬季。「でい」は茶の間のこと。方言雑集に「でゑぎ 座敷也」とあるのも同じことである。武家造りの住宅で、客間あるいは接見に使われた部屋を出居と言ったのが、農村に残ったのである。「いで」は、去んで、である。

おはぐろ水に月のさし込むほど端近では、冷えを感じるので、早く茶の間のこたつに引込んで暖まれ、というのである。この句に転ずると、前句の月がいかにもつめたく感ぜられる。以上で二の表が終った。次の六句は二の裏、すなわち名残の裏である。

米の値をのほうづもなく引上て

雑。「のほうづもなく」は、途方もなく、である。米価の暴騰である。「引上て」と、見えざる対象に託した言い方で、反って意味を強めている。「のほうづもなく引上げやがて」と、でいのこたつに寄せた人たちの時評でもあろうか。

かまけながらも法事つとむる

雑。「かまける」は、北信方言の代表的なものの一つであろう。ぐちをいうことである。一茶の「父の終焉日記」に亡父をしのんで「夜々にかまけられたる蚤蚊かな」とある。

一茶の方言連句について

前句を受けているので、米の値上りでぐちをいうのは、農家以外の人とも思われるが、また農家で米の値が出たので、急に取越しの法事でもいとむことになって、その家の老人などが、いそがしがつてぶつぶつ言っているとも取れる。

がんちょうな柱の見ゆる台どころ

雑。「がんちょう」も東国言葉である。がつしりとした大黒柱が、台どころから透けて見えるのである。法事をつとめる家の体で、大家であることを思わせる。一茶が常々出入りしていた柏原本陣の台どころなど、思い浮かべていたのかも知れない。

あちや一杯とうけるさかずき

雑。「あちや」は感嘆詞。方言雑集に「あちやあ ソレナラバニ同」とある。

大家に出入する小者などが、台どころで馳走になっているさまである。「あちや」の感嘆詞に恐縮とよるこびの情があふれている。ももひき、半てん姿の男が、手に持っていた手拭いをあわてて肩にかけて、からだもろとも手をさし出して、さかずきを受けているかっこうなどが目に見えてくる。

餓鬼どもがへし折て来る花の枝

春季。名残の裏五句目、名残の花である。いたずら者の餓鬼どもが、得々として花の枝をへし折ってくる。乱暴ろうぜきながら、粗野な方言連句の終りを飾るにふさわしかろう。前句は、浮かれている花見人の酔体とも思われてくる。

やみくもに啼く藪のうぐいす

春季。「やみくもに」は、むやみやたらに、である。うるさいほ

ど、敷うぐいすが鳴きかわしているのである。花の句を受けて、蒸れのぼるような春の陽気を附けている。これも、ゆたかに穩かにうたいおさめることを本意とする揚げ句（最終句）の格になつてゐる。

以上で歌仙三十六句が満尾した。それぞれにおもしろい附け意であるが、全体として変化に乏しく、殊に初裏の終りから二の表のはじめにかけて無理が目立っている。名残の裏六句はすらすらと行っているが、初裏の花と名残の花と、どちらにも若者や子供たちを点出して、相似た作意となつている。なお二の表の月「はぐるの水」をはさんで、前後とも休息をうながす呼びかけとなつているのは、いかにも拙い。

このような欠点は一茶自身が知っていたはずで、このままでは公表する気持になれず、しかも、興に乗って一旦まとめ上げたものに入手を入れるのは、全体をこわしてしまうことになるので、書きすてのままにしてみました——清記したものが散佚してしまつたとすれば別問題であるが——というような事情もあつたかと思われる。そのようなわけで、私はこの独吟歌仙を敢えて未定稿であると考へたのである。

しかし、これだけの方言をこなして、連句制作の規準に従つて、これだけの巻を成している技倆は、かけ出しの俳人の及ぶところもなく、一茶をおいて他のたれをも考えられない。また、その一句一句に、一茶の口癖、一茶の性癖、一茶の郷里の習俗・自然が、さながらに描き出されているのである。